

残照

マスターの中原と客一人だけの小さなカフェに、珈琲の香が、北国の街にもようやく闖けた春の空気に溶けて漂っている。

中原には、壁の写真の前に立つその一見客は自分よりいくつか年下かと思えたが、互いに老境に違いはない。それでも人は青春の思い出を語るいつとき、若者に戻るものだ。

「それにしても、ここでこの写真に出会えるとは！」

若い思いが弾むような客の嘆声だった。五十年近い昔に県内の大学生だったその男は、当時この近くにあったライブハウスのジャズライブで、演奏する女性ピアニストの容姿に魅せられ、以来その佳人を見るために年に二回のライブに通ったと言う。

見染めたその彼女と言葉を交わす機会も遂に得ぬまま卒業し、郷里の四国で就職して幾星霜。この春に定年退職して、懐かしいこの地を再訪したと聞けば、まさに彼自身も言うところの「月並みなセンチメンタルジャーニー」ではあった。

件のライブハウスは既にないと知った彼が、たまたま入ったこの店で壁のギャラリーの中にバンドの演奏写真を見出し、驚喜したのもうなずける。中原は、それは撮影が趣味だった知人の古い作品だと説明し、写真の前に立つ客に向かって問わず語りに話した。

「私もそのバンドの演奏を見たことはありませんよ。そのピアニストも覚えてます。ピアノの腕はまあ、アマチュアレベルでしたが、好きで打ち込んでたんでしようね」
客は中原を振り向きもせず、壁の写真を見詰めたままで応えた。

「私には演奏のことは分からないんですが、この女性の独特のオーラは忘れられない」
写真の中で鍵盤に指を躍らせる若い女は鮮やかなブルーのドレスをまとい、その色白の細面は漆黒のセミロングの髪に半ば隠されている。中原はそっけない口調で訊いた。

「彼女、そんなに良かったですかー？」

ようやく自分の席に戻った旅人は、珈琲を飲み干し、視線を宙に浮かせてつぶやいた。

「どこか謎めいてるというか。上品で、影があるのに、華もあって……。思い切って何か声をかければよかったですね、小心者ですね。青春に悔いありってやつです」

若き日の追憶に浸る客のカップに、中原は「サービスです」と珈琲を注ぎ足した。それに会釈した客は、最後に残しておいたのであるう問いを、ためらいがちに口にした。

「…それで、あの人は今は…。マスター、もしかして、何かご存じとか？」

「さあ…。あのライブハウスが消えてからもう何十年にもなりますし、バンドメンバーのことなど今では誰も知らないでしょう。往時茫茫ですね。何もかも」

予想どおりの答えを聞かされたという表情の客に、「でも」と低いトーンで付け足した。

「いいお話を伺いました。あのピアニストも果報者です。もしも彼女が、お客さんのことを何処かで耳にしたら、きっと幸せに思いますよ」

未練を背にまどった客が去るのを見送り、中原は日溜まりの春愁の中で、あの遙かな日々を偲びながら、黙然とカップを洗った。窓越しの柔らかな日差しが、うつむいて水を使う彼の上品な白髪を淡く輝かせ、今も端正な横顔に刻まれた皺ひだの陰を深めている。

